

思い思いのスローガンを掲げて、長崎駅前から大波止夢彩都前までパレードし、原発はいらないと訴えました。

この行動は、同日東京で首都圏反原発連合(反原発)が主催する「反原発百万人大占拠」行動に呼応したものです。東京では雨の中、首相官邸前、国会前、東京電力本店前、経産省前などでのべ十万人(主催者発表)が参加。全国の二百数十カ所でも集会、パレードなどを繰り広げられました。

## 原爆遺構巡りを実施

### 如己堂〜浦上天主堂〜山王神社

十一月十日(土) 城山憲法九条の会は、長崎の

証言の会運営委員で「証言」編集長の森口正彦さんに案内をお願いし、如己堂〜浦上天主堂〜旧長崎医科大学門柱〜山王神社に至る約一・五キロの原爆遺構巡りを実施しました。

記念館前に集まったのは、城山憲法九条の会の他、浦上九条の会や西浦上九条の会からの参加も含め九名。

森口さんは、最初に如己堂の前で、永井博士の小説「長崎の鐘」の初版本を示しながら、「長崎の鐘」は、日本軍が東南アジアで行ったさまざまな悪い侵略の実態を記した



記録とセットにすることでGHQが刊行を許したと、また、戦後間もなく小学生向けに文部省が発行した「あたらしい憲法のはなし」は、今の九条の会のパンフレットのような内容であることを紹介しました。

続く浦上天主堂では、被災前の天主堂の何十トンもある鐘の屋根部分が爆風で数十メートルも吹き飛び、今もそれが西側敷地の崖下に保存されていることを示しました。



また、度重なる幕

府によるキリシタン弾圧の中で、全国各地に身柄を送られたことを示す碑が天主堂の傍にあることを示とともに、永井博士が原爆受難者追悼ミサの中で、原爆で亡くなった九千八百名の浦上のカトリック信者は生贄の羊であったとして、その犠牲によって幾千万の人々の命が救われたと述べたことなどを紹介し、献身的な救援活動とともに博士には功罪二つの面があるとの考えを示しました。



その後、旧長崎医科大学(現長崎大学医学部)では、門柱(約7t)が爆風で数度傾いたまま保存されており、今なお原爆の威力を見せ付けていることを紹介しました。

引き続き旧浦上街道に続く山王神社の参道にあつた三



つの鳥居は、原爆で三の鳥居は倒壊、二の鳥居は一本を残して倒壊、一の鳥居は残ったもの、その後交通事故により壊れたこ

とを紹介。二の鳥居は今も右に角度がずれたままであることを示し、爆風のすさまじさを語りました。また、神社の樹齢六百年を超えるクスノキが、被爆で殆ど枝を吹き飛ばされ、黒焦げの状態になりながらも、戦後、新芽を出したことで、多くの市民が励まされたことを紹介、今なお青々と枝を広げ、その姿を残していることに、生命の不思議さたくましさを感じる話しました。

最後に森口さんは、戦争や被爆の証言は基本的にはその人個人の体験でしかない。大切なのは、その背景として、日本がどのような経緯を経て戦争に突入していったのかを知ること、また、被害者としてだけでなく、加害者としての立場に日本があつたことと無関係であつてはならないと語り、昨今あからさまに憲法改正を叫ぶ政治勢力の結集の動きに強く危機感を覚えると締めくくりました。

